

幼児における跳び箱遊びの技能獲得の実態

西田 明史

(西九州大学短期大学部 幼児保育学科)

(平成 29 年 11 月 2 日受理)

Akifumi NISHIDA

(*Department of Early Childhood Education and Care, Nishikyushu University Junior Collage*)

キーワード：動きの系統性・パフォーマンステスト・類型化

【はじめに】

近年、子どもたちの運動能力の低水準化や格差拡大、運動実施の二極化等の健康課題を解決するための方策が示されている。例えば、子どもが「十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら身体を動かそうとする意欲が育つようにする」保育内容（幼稚園教育要領，2008）や、日常的な遊びや運動遊びを通した体力づくりのための科学的根拠に基づいた計画的な健康教育（保育所保育指針解説書，2008）が必要だとされている。2012年に文部科学省が策定した幼児期運動指針によると、幼児期は、発達の特性に応じた様々な遊びを通して楽しく体を動かしながら多様な動きを獲得することが重要である。幼児期の運動発達に寄与する保育環境に関する先行研究においては、幼児が遊びたくなるような物理的環境も然ることながら、人的環境としての幼稚園教諭・保育士の役割の重要性が示されている。また、専門指導者による幼児期の運動遊びプログラムと指導法については、子どもの主体性、長期的・総合的視点による検証が課題だと考えられている。

運動技能は運動能力を基盤とし、運動経験によって獲得される。ラルソンの運動能力の階層構造によると、スポーツ技能を高めることは、基礎運動技能のみならず基礎運動能力を高めることにつながる。つまり、幼児期の運動発達に寄与する運動遊びプログラムに関する研究では、運動能力への影響を考慮しながらも、実践可能な運動技能の量的獲得（動作の多様化）と成就度の向上（動作の洗練化）を図ることが重要な視点である。

そこで、本研究では、文献研究ならびに運動遊びの実践現場の観察調査から得た知見に基づいて作成した跳び箱遊びのパフォーマンステストを用いて、専門指導者による年間を通した意図的・計画的な運動遊びの実践により幼児が獲得する運動技能の成就度を検証した。各パフォーマンステストの成就度から、跳び箱遊びに関する運動技能の「発達の順序性」や「つまずきの傾向」など、技能獲得の特徴について明らかにすることを目的とした。

【研究方法】

1. 調査対象者およびデータ収集の方法

専門指導者による運動遊びの実践を保育に組み入れている九州4県の幼稚園・保育所に在籍する4～5歳の年中児395名（最大数：男児205名、女児190名）および5～6歳の年長児584名（最大数：男児277名、女児307名）の計979名を対象とした。調査期間は、2014年10月中旬から11月下旬であった。幼児体育の専門指導

員の協力を得て、観察的評価法により運動技能の成就度のデータを収集した。

2. 調査項目

運動技能の調査には、運動遊びの年間プログラムを素材にした6項目の跳び箱遊びの運動技能に関するパフォーマンステストを作成して用いた。パフォーマンステスト項目には、跳び箱遊びに関するパフォーマンステストの中核をなす技能として、専門指導者による運動遊びの年間プログラムの中から「開脚跳び越し」をはじめに抽出した。さらに、「開脚跳び越し」の技術構造を考慮し、下位運動の「踏み跳び」「よじ登り」「手足跳び移動」「支持跳びのり」「跳びおり」の5項目をパフォーマンステストとして選定した。なお、動作の方法と評価の観点は表1に示す。

運動技能の成就度の評価に関しては、幼児期の動作再現性の低さを踏まえた上で、幼稚園教諭・保育士が日々の保育活動において子どもを観察・記録することで判定可能な方法が必要であると考え、金子（2002）の運動形成の五位相に着目し、5段階（「やろうとするが、できない」～「いつでもできる」）の評価法を作成して用いた。

3. 分析

分析に際し、技能成就度の「やろうとするが、できない」～「いつでもできる」の5段階の各評価に対し、それぞれ1～5の数値を割り当てた。跳び箱遊びの各運動技能の成就度について性差を検証した結果、「手足跳び移動」に1%水準で有意差が認められたため、6項目すべてにおいて男女別に分析した。跳び箱遊びに関する運動技能の獲得状況の類型化を目的として非階層的クラスター分析（k-means法）を行った。クラスター分析で得られた各タイプについて、跳び箱遊びの各運動技能の成就度の平均と標準偏差を求めた。すべての統計処理には、SPSS 22.0Jを用いた。

【結果および考察】

跳び箱遊びの技能習熟度の年代間差について、Mann-WhitneyのU検定を用いて検証した結果、男女児ともに「よじ登り」「手足跳び移動」「支持跳び乗り」「跳び降り」の4項目において有意差（ $p<.01$ ）が認められた。同様に性差について検証した結果、年中・年長の各年代ともに「手足跳び移動」の1項目のみに有意差（ $p<.05$ ）が認められた。年代別・性別における項目間の差について、Friedman検定を用いて検証した結果、技能習熟度はテスト項目間において有意差（ $x=222.8\sim379.4$ 、いずれも $p<.01$ ）が認められ、技能難度は「手足跳び移動」が最も高く、次いで「開脚跳び」「支持跳び乗り」の順に高かった。年中男女・年長男女の各群において、「よ

じ登り」「跳び降り」は、技能習熟度の第1四分位数が「いつでもできる」であり、難度が低かった。技能習熟度の四分位数、Friedman検定で算出した順位、多重比較検定により算出した効果量を考慮すると、年中児・年長児ともに、「跳び降り」から「踏み跳び」、「支持跳び乗り」から「手足跳び移動」にかけて難度が上がる傾向にあった（図1・2）。

跳び箱遊びに関する運動技能の獲得状況の類型化を目的として、技能習熟度が著しく高かった「よじ登り」「跳び降り」を除いた4項目を用いて、非階層的クラスター分析（k-means法）を実施した。その結果、技能獲得タイプは、男女児を合わせると5つに分類できた（図1～4）。1つ目は、男女児共通に見られ、開脚跳びを含めた6項目すべてが「頻繁にできる」以上の水準のタイプであった。2つ目は、女児に見られ、開脚跳びは「成否を同程度繰り返す」以下の水準であるが、他5項目が「頻繁にできる」水準のタイプであった。3つ目は、男児に見られ、開脚跳びと手足跳び移動の2項目は「成否を同

程度繰り返す」以下の水準であるが、他4項目が「頻繁にできる」水準のタイプであった。4つ目は、男女児共通に見られ、開脚跳び・手足跳び移動・支持跳び乗りの3項目は「成否を同程度繰り返す」以下の水準であるが、他3項目が「頻繁にできる」水準のタイプであった。5つ目も男女児共通に見られ、開脚跳び・手足跳び移動・支持跳び乗り・踏み跳びの4項目は「成否を同程度繰り返す」以下の水準であるが、他2項目が「頻繁にできる」水準のタイプであった。したがって、跳び箱遊びに関する技能の獲得は、よじ登り・跳び降り→踏み跳び→支持跳び乗り→手足跳び移動→開脚跳びの方向（順）に進むと考えられた。

以上のことより、幼児期の運動発達を助長する運動遊びプログラムには、技能習得の難易度と方向性、中核的遊びへの影響度を指標とした遊び群の配列が必要だと考えられた。ただし、技能習得の効率性を求めるあまり、経験できる基本的動作の種類が偏らないように配慮する必要がある。

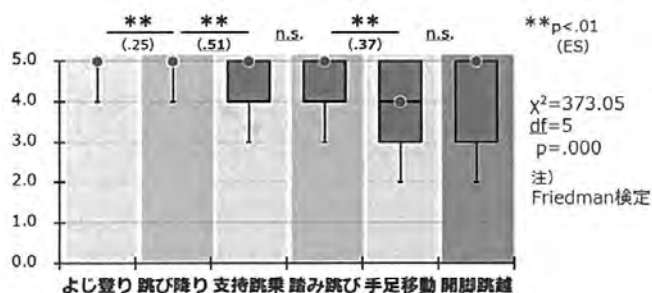


図1 運動遊びの技能難易度（年長男児）

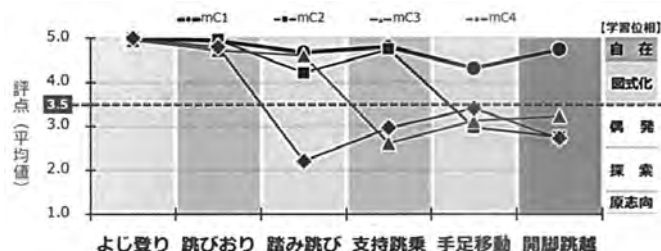


図3 タイプ別に見た跳び箱遊びの技能習熟度（年長男児）

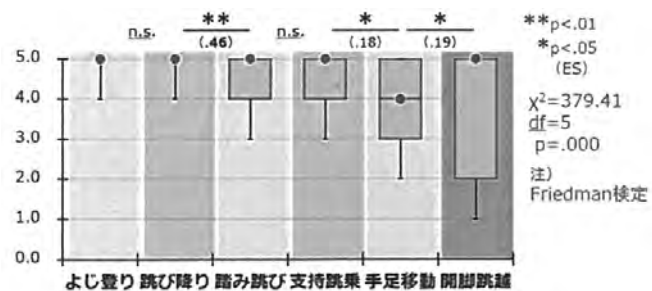


図2 運動遊びの技能難易度（年長女児）

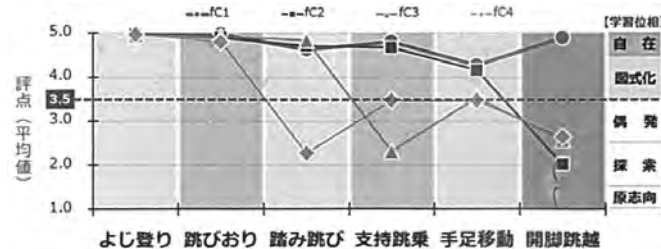


図4 タイプ別に見た跳び箱遊びの技能習熟度（年長女児）